

下総国葛飾郡神間村文書No.344 (春日部市郷土資料館所蔵)

(表紙)

一 寛政七年

御鹿狩二付御触書之写

卯二月 神間村

忠右衛門

御鹿狩二付御触書写

来春小金野御鹿狩有之候

二付勢子人足并道造御普請等

其外御用人馬之儀郡代支配

御代官伊奈友之助大貫治右衛門

三河口太忠菅沼安重郎竹垣

三右衛門断次第無滞可差出候将

又御場所并御道筋等さわ

り二相成候木竹は右御代官

其外掛り役人差回数次第可

伐払候此旨不可致違背もの也

寅十月

丹後印

追而此触書披見之上別紙帳

面へ村々役人共請印いたし

早々相廻シ留り村方より

丹後役所へ可相返スもの也

葛飾郡村々

役人共

同

来春小金原御鹿狩勢子

人足別紙帳面之通り二候条

老人子供病人相除兼而小

前へ触当置

御時節二至リ触当次第差

支なく様取計可置尤人足

詰メ場之義追而触当候条可意其

得此触書帳面村下二令請印

昼夜不限刻付ヲ以相廻シ留リ

村より我等役所へ可相返スもの也

寅十二月

竹三右衛門印

三太忠印

御鹿狩人足割

人足九拾式人 神間村

右村々

名主

□□□

同

一 当三月上旬下総国小金野

中野牧ニおゐて御鹿狩有之

候ニ付下総国并上総国大

多喜辺より猪鹿追寄候積リ

被仰渡候間一村每人別惣掛リ

ニいたし隣村申合小金野方へ

順能追立可申候稀成御かり

之義兼而村々諸作物荒シ

難義ニ為及候猪鹿此御時節

ならでたやし可申様無之候

間一村限猪鹿不残精出シ

御かり場の方へ追立可申事

一 右追立之義たとへば上村より

追出シ候ハ、上村之人別惣掛リ

いたし足並能揃中村へ追出シ

申候ハ、中村之人別惣掛リニ

致上村之人別も一ツ加り足並

能揃又下村迄追出シ候ハ、下

村之人別惣掛リニいたし

上村中村之人別一ツ加り足並

ヲ能揃其次之村へ追出シ候ハ、

又右之如何ケ村ニ而も同様

ニ心得追可申候畢竟猪鹿

追遣候向之方ニ而人声いたし

物さわがしく候而は請勢

子之道理ニ相当リ猪鹿向へ

走り不申切角追出シ候猪鹿

脇へきれ又ハ跡へ戻リ洩多相

成事故追遣シ候先々へ兼而

人足集配置候義不罷成ニ付

前文之如村毎二人別加リ候様

との事ニ候間右之趣意能

々相弁へたとへば上村より中村

迄追出シ候内は中村ニ而大勢人

声等不致様可成丈物静ニ致

置上村之人別追参リ候ハ、

其時一同声ヲ立足並揃致

一所ニ加リ追可申候何ケ村ニ而も

右之心得專一之事ニ候尤

五六ヶ村も追参候ハ、遠方之

ものハ見計少々引とらせ

可申候或ハ勝手ヲもつて追

参り度存候ものハ勝手次第

御狩場迄も追可参候若

等閑ニ心得早々引とり候

もの有之ニおゐてハ後日相

聞候共急度可有其咎メ事

一 小金野江御成御日限相定リ
候ハ、猶又早々可申触間凡
一日二三四里程も追候積リ
ヲもつて 御成御当日より
三日前迄ニ上総国大多喜
辺よりハ下総国六方野縁リ
迄追詰メ目印のさいみ建
置候所ニ而踏留足揃致可
居候下総国銚子辺よりハ同
国佐倉城下鹿嶋川縁リ
迄追詰メ目印のさいみ建
置候所ニ而踏留足揃致可
居候其節勢子差引之役
人夫々ニ差図可致間可任其
旨右之心得ヲもつて大多喜
辺之村々ハ六方野迄之里
数応し追方之日数相考
銚子辺之村々ハ佐倉城下
迄之里数ニ応じ追方之日
数相考置結城辺之村々ハ
利根川迄之里数相考置
御成御日限相定申触候ハ、
前文之通り
御成御当日より三日前迄ニ
其場所迄追詰メ候様可

致事

一 追初候得は前文之通段々
村毎ニ人別加リ休なく且ニ
追不申候而ハ猪鹿跡へ戻り候
間凡半日ニ追寄可申と見詰メ
候場所へ可成丈川ニ而も沼
ニ而も又ハ谷津田堀等ヲ前ニ
あて候様兼而目印の笹
引致候敷又ハさいみ竹ニ而も
建置其場ニ而一同外へ散
不申昼食致程能休足
致候ハ、足並能揃其日之
踏留迄ハ無休追通シ可申候
右踏留之義も可成丈前同
様川沼谷津田等ヲ前ニあて
候様是又兼而目印笹引致
置其場ニ至候ハ、夜明候迄
所々ニ而火焚折々声ヲ立
人足相互ニ申合一時宛も代リ合
眠リ可申候一同眠リ申候而は
切角夫迄追寄候狩鹿（獲）悉
跡江戻り申候間可成丈は眠
不申火ヲ焚声立夜明候ハ、
又右之如昼食之足揃迄

ハ休なく追通シ可申候幾日

幾夜追申候共右之法破リ

申間敷候事

一追候節銘々手頃之竹壱

本竹貝又ハほら貝壱つ宛

持其外鳴物勝手次第

持出シ藪林之中等ニ猪鹿

籠可申場所ハ右鳴物ニ而

追出シ且猪鹿向イ参リ候

ハ、声ヲ立右竹ニ而追払可

申候

一御料ハ御代官私領は領主

地頭より兼而相渡シ置候鉄

炮村毎ニ不残持出シから

筒放シ可申候右追初之場

所足揃場所踏留之場所

ニ而重ニ打払可申候事

右之條々村役人ハ勿論小前

之もの共へも一同隣村相互ニ

能々申合追方之節ニ臨ニ不

及混雜ニ様兼而手配致置

村毎ニ猪鹿不残様追尽シ

可申候若等閑之取計方

有之ニおゐてハ可為曲事もの也

寛政七年

卯正月十五日 丹後印

下総国葛飾郡

金杉村ヨリ

大堤村迄

右村々

名主

与頭

百姓中

追而此触書一村限写取別紙村

名之上へ村役人承知印形致

刻付ヲもつて早々順達いたし

留り村より丹後役所へ可相返ス若

落村有之候ハ、其隣村より委細

相達べく候

来ル三月五日下午総国小金

中野牧ニおゐて 御鹿がり

御成御佐太^(抄込)ニ付先達而相触

候趣ヲもつて来ル三月二日迄ニ

東之方ハ佐倉城下鹿寫

川辺り南之方ハ六方野縁り

迄北之方ハ利根川縁迄追話メ

踏留居り役人差図を可相

待尤雨天等ニ而

御成相延候事も難計左様之
節ハ右踏留之場所進退

相成不申候間兼而其段相心
得夫食無差支様余慶ニ

心懸ケ可罷出候如此申触候上ニ
も夫食之手当少く飢渴

ニおよひ候共一己之不覚悟

ヨリ起候事ニ付不及佐太間（抄）

可存其旨もの也

卯正月廿五日

丹後役所

下総国葛飾郡

庄内領

金杉村より

小平村迄

右村々

役人中

追而此触書別紙村名之上へ

村役人承知印形いたし

刻付ヲもつて早々順達留り

村より丹後役所へ可相返もの也

追而東西葛西領洲江領小金

領村々出人足ハ勢相濟候上（字脱カ）

御獲松戸河岸迄持送り

相勤候事ニ付御狩相濟

候ハ、一纏ニ集り残り可申尤

御扶持方ハ式人分被下之候

当卯三月五日小金ノ原

御鹿狩勢子人足割村

限出人足書面之通候条別

紙書付之趣相心得村毎ニ

宰領付添三月二日朝

四ツ時迄別紙帳面ニ記置候

揃所へ罷出勢子差引役人

之差図を請猪鹿追立ハ

勿論立切共ニ可勤右之下村

限有人別不殘罷出村内

追立可申候老人子供病

人等差出候歟又遅參不參

致ニおゐてハ急度相答メ候

条得其意触書村下ニ令

請印飛脚之ものへ可相

渡もの也

三河口太忠

卯二月三日 竹垣三右衛門

右村々

名主

年寄

百姓代

下総国葛飾郡中ノ台村

字浅間下詰人足

下総国葛飾郡

人足九十二人 神間村

人足出方心得書

一 老村限人足何拾何人何と

認メ候幟老本宰領もの

持出人数右のぼり江引合

可申旨候事

但シ宰領之もの高張

焼灯老張宛持出可申候

村限出人足ニ応し弁当

呑水等用意可有事

但雨天御延引日送り

被仰出候節之ため

二日分余慶可持出事

一 猪鹿追立用い候長七八尺

ぐらい竹カ棒老本宛并長三尺

ほら貝

位之繩老筋ツ、竹貝之内

老ツ宛持出べく事

但シ本文之外鳴物勝手

次第持出可申候

右のぼりてうちんもち人足

高割之外可出事

右之通心得差支なき様

可致候以上

卯二月

東神間村

幾

覚

三月二日朝六ツ時出立

愛宕山江立合村着当仕

夫より宝珠花岸シヲ渡ル

渡シ場ハ混こさついたし候故

右之通りニ御座候舟錢百五人ニ而

式朱夫より中野台村江四ツ

時詰メ申候而九ツ半時着当

ニ付人足九拾式人老人別ニ

くり出シ相改申候

但シ 二ノ手掛役人

其外セ話人

村役人立合

二日夕

宿野田町ぼう山

両国屋ニ而焚出シ致

宮崎新田迄持送り申候

但シ二日夕はんより三日之昼食

迄

但シ米百文ニ壱升五合

木銭米壱升ニ五十文ツ、

中野台着当払濟夫より上花

輪村人足式人案内附宮崎

□^(新)田へ立切申候其夜あめ

□□申候故人足ハ近所の

□□や杯取寄小屋かけ致

□□□□申候才料共ハ

□□□家富右衛門と申百姓

家借り代りニ休申候

茶代五百文翌朝六ツ時

出立いたし追物申候三日之

昼食一之屋の新木戸是迄

宮崎より道法ニリ程程能休

足致又追初メ八ツ半時今谷新

田新木戸踏留是迄道法壱リ半

程此所水戸海道也宿其近村中

新宿半三郎三日夕はんより四日

夕はん迄焚出シ持送り申し候其

夜其場所ニ居り人足代り合ニ

眠り申候四日朝六ツ半時出立

追初申候夫より逆井新田ばら

く松迄九ツ時追詰メ申候此所

四日夜踏留ニノ手中之台村

詰メ人足ハ四十壱番より四十

五番迄詰メ居り申候筈ニ而

当村ハ四十四番ニ立切申候

此所民家有逆井村与惣左衛門

と申人宿ニ頼申候其夜ハ所々

ニ而かゞり火焚鉄炮放掛リ

役人中御勘定方度々御廻リ

□成候故眠り候事相成不申

□□□^(志)いくついたし候比ハ

□□□□から筒放シ物声

□□□□しく少も眠リ

□□□□夜明比ニは掛り役人

□□追初候様被仰付候故足

揃致追初申候其日焚出シ不仕

持參給物小麦もち杯給申候追初

候而より古宿谷津と申を越

相図の鉄炮承段々追詰メ

夫より三度御相図迄踏留居リ

三度目御相図の大筒二放承

三之手と手合御立場へ追詰メ

申候右踏留より追出シ候而は

猪鹿夥敷參申候を追返シ

く仕候夫迄ハあまり猪鹿

見へ不申候

五日

九ツ半時迄ニ御立場へ追詰メ

居リ御かり見物仕候其面

白事筆ニも尽し難し

御供の御大名御旗本

衆皆一二三四五六七の印の

御将ぞく馬上ニ而御出被成

御かり被遊候

御上覽一時期ニ而程なく

□□ニ御座候夫より相図鉄

□□□引払可申と存候処

□□□様かけ引役人

□□□□候故しばらく

□□□□候所御下知無之故

□□合引取申候

又逆井村与惣左衛門へ

返リ一宿仕候木銭米代

夕朝ニ而

壱人前八十五文つゝ

御かり場より逆井へ戻リ

道筋野火夥敷つき扱々

難義いたし漸々通り申候

翌六日朝五ツ時逆井出立

御かり場跡一見夫より

松戸宿舟橋一見仕

右舟橋を渡リ二郷半

領小向へ出同領市助村ニ

而舟を立中野村迄□

申候舟銭壱人前三十式文ツゝ